

2011年度 早稲田大学 商学部

日本史 解答例

① 旧石器文化～古墳文化 <やや易>

問A 4 問B 4 問C 5 問D 1 問E 3

問F 2 問G 6 問H 5 問I 3 問J 2

「適当なものがなければ6をマークせよ」とあって消去法が使えないため、問E・問Gがやや難しい。これ以外の問題を間違えた場合は、各用語をどの深さまで理解しておく必要があったのかを検証しよう。そのレベルを他の用語を覚える際にも適用していかないと、今後も正誤問題でつまづき続けることになる。

② 承久の乱・山城の国一揆 <易>

問A 4 問B 5 問C 5 問D 1 問E 5

問F 4 問G 2 問H 3 問I 1 問J 5

早稲田ではあまりにも定番となっているテーマからの出題。問Dや問Iを正解できなかった人は、史料問題対策が単なる用語チェックに終わっていたためだろう。史料文のすべてを口語訳できるようにする必要はないが、出題されやすいポイントは意味をつかんでおく必要がある。通年授業ではなかなか史料のチェックができないが、オプション講座「でるとこ日本史プラス」ではチェックしていた内容であった。

③ 『蘭学事始』 <標準>

問A 3 問B 1 問C 2 問D 4 問E 4

問F 2 問G 5 問H 4 問I 2 問J 3

史料は有名部分と未見部分で構成されている。問H・問Iはどちらも知っていて正解するのではなく、推測して解く問題でやや難しい。また問Jは、同じ化政文化に属する人物の順序が問われていて難しい。早稲田の文化史の難しさがかいま見えるだろう。

④ 近代の教育 <難>

問A 2・5 問B 1・4 問C 2・3 問D 4・5 問E 3・4

問F 2・5 問G 1・5 問H 3・5 問I 2・5 問J 2・5

よく「2つ選べ問題は1つ合ったら1点ですか？」という質問があるが、商学部の場合は完答で1点であることは間違いない。なぜなら60点満点で問題数が60個あるからだ。それにしてもこの大問は、今年の早稲田の問題の中でもっとも難しい大問であった。問A・問Bがやや難で、問C・問F・問G・問Iが難問。この大問に時間をかけすぎると、次の簡単な大問5・大問6を解く時間がなくなって大損してしまう。大問4を後回しにして、先にそちらで点数を稼ぐべきだった。

5 大正・昭和初期の経済 <易>

問A 1・3 問B 2・5 問C 3・5 問D 1・2 問E 3・5

問F 若槻礼次郎 問G 台湾銀行 問H 緊急勅令 問I 高橋是清

問J 支払猶予令〔モラトリアム〕

大問4とは一転して、拍子抜けするほど易しい問題であった。全問正解した人が多いだろう。

6 戦後の経済 <易>

問A 復員者〔復員軍人・復員兵〕 問B 闇

問C 預金 問D 鉄鋼 問E 復興金融金庫 問F 管理闘争 問G 争議

問H インフレは収束したが、人員整理によって失業者があふれ、景気が悪化した。
(35字)

問Aは「復員」でも正解の可能性はあるが、空欄の後に「引揚者」という語句が続くことからベストな解答は「復員者」である。勘違いしがちだが、「復員」の対義語は「動員」で、「復員」に「人」という意味は含まれない。さらに言うと、東京書籍の教科書に「軍隊からの復員者と民間の引揚者を大量に受け入れた国内の国民生活は困難を極めた。」とある。山川出版の『詳説日本史』を読んでいるだけでは気づかないだろうが、入試は山川出版の教科書だけで作られているわけではない。

講評

日本史用語は英語や古文とは違い、言葉の意味を暗記すればすむわけではなく、時期とともに覚える必要がある。そのための勉強は、「教科書チェックペン勉強法」でもなければ、「一問一答集勉強法」でもないことはわかるだろう。そもそも教科書を一冊極めたとしても、それ以外の教科書から出されてしまえば刃が立たないのだ。「一冊の問題集を何度もやり直す」なんていうのも、MARCHレベルを第一志望としている受験生にとってすら、愚の骨頂である。